前方領域でのQCDと核子構造

渡邊和宏(成蹊大学)

Outline

- ●背景
- 高エネルギー極限でのQCD
- •LHCでの前方粒子生成
- FPFでの粒子生成
- 空気シャワーや重イオン衝突との関係

第21回高エネルギーQCD・核子構造勉強会 11/01/2023,理化学研究所+オンライン







▶ 宇宙創成直後に存在した物質の時空発展 ▶ 高温の物質生成,相転移と冷却 核子や原子核を衝突させた実験がBNL-RHIC, CERN-LHCで行われている. 核子や原子核の構造は重要なイ ンプット.

エネルギースケールが陽子の質量よりも大きい ($\gg 1$ GeV),もしくは量子力学の不確定性原理($Er \sim \hbar$) より, 陽子のサイズよりも小さい領域(≪ 1fm)にある クォークとグルーオンの振る舞いを調べることで、核子 や原子核 (**可視物質**)の量子構造や性質を理解したい.









核子内の基本自由度とQCD



Standard Model of Elementary Particles



核子・ハドロンは"白色"で SU(3)カラー対称性を持つ. クォークとグルーオンはどの ように核子内に閉じ込められ ているか?

From Wikimedia commons

 $\mathscr{L}_{\text{QCD}} = \bar{\psi}(iD^{\mu}\gamma_{\mu} - m_{q})\psi - \frac{1}{\Lambda}F^{a}_{\mu\nu}F^{a\mu\nu}$

Strong coupling constant $\alpha_s = g^2/(4\pi)$ 0.35 τ decay (N³LO) \vdash low Q^2 cont. (N³LO) HERA jets (NNLO) 0.3 Heavy Quarkonia (NNLO) e⁺e⁻ jets/shapes (NNLO+res) ⊢∗− pp/pp (jets NLO) ⊢∎⊣ 0.25 EW precision fit (N³LO) $\vdash \bullet \dashv$ pp (top, NNLO) $\alpha_{\!s}(Q^2)$ 0.2 $Q \sim 1/r$ 0.15 $\Lambda_{\rm QCD} \sim 0.2 \, {\rm GeV}$ 0.1

 $\equiv \alpha_{s}(M_{Z}^{2}) = 0.1179 \pm 0.0009$

10

100

Q [GeV]

August 2021

0.05









ハドロントモグラフィー

CT = Computed tomography

Rutherford scattering (1911)



(6 types of quarks: up, down, charm, strange, top and bottom)

Modern Rutherford scattering





credit:JLab





フェムトスコープ

Semi-inclusive e^+e^- annihilation: $e^+ + e^- \rightarrow h + X$



ハドロンの発現.始状態にカラーフロー無し.

Semi-inclusive DIS: $e + p \rightarrow e' + h + X$



核子の構造.原子核ターゲット(ビーム)が可能.

PDFs and FFs are equally crucial for global data fitting!



DIS/SIDISと相補的. 終状態にカラーフロー無し.

Hadron from Hadronic collisions: $p + p \rightarrow h + X$



核子構造とハドロンの発現.原子核ターゲット(ビーム)が可能.





















まだ未知の情報 4+1D

近年活発な研究分野 GPDs: 前回の勉強会 TMDs: 今回の勉強会



比較的よく知られている **1D**

Wigner Distributions





素粒子標準模型 vs. 最高衝突エネルギー実験のデータ





素粒子標準模型(EW, QCD摂動計算+PDF)は, 様々なLHCデータを非常によく記述する.

From PDG





▶ 陽子のスピン(1/2)の起源

Jaffe and Manohar, Nucl. Phys. B 337, 509-546 (1990)

 $\frac{1}{2} = S_q + S_g + L_q + L_g$

クォークのスピン + グルーオンのヘリシティ + 軌道角運動量

▶ 陽子の質量の起源

- クォーク質量(ヒッグス機構)の寄与はわずか1%.
- グルーオンは質量がないが、そのダイナミクスが残り99%の寄与 を与える.

>> ハドロンの生成機構

 クォークとグルーオンはカラー荷を持つ、一方で、ハドロンは カラー荷を持たない.









 $\frac{1}{2} = \frac{S_q + S_g}{2} + L_q + L_g$

▶ 陽子のスピン(1/2)の起源

Spin: measured at RHIC, COMPASS,...

$$S_q = \frac{1}{2} \int_0^1 \Delta \Sigma, \quad S_g = \int_0^1 \Delta G$$

~ 30%



広い運動学領域に渡るパートン分布の精密 情報が,核子の性質を特徴づける.





Part I: 高エネルギー極限でのQCD



large-x (small- \sqrt{s})

small-x (large- \sqrt{s})







パートン分布関数と量子発展



• DGLAP量子発展方程式が $lpha_s \ln(Q^2/\Lambda^2)$ という大きな量子 補正項を足し上げ,クォークとグルーオンの分布を混ぜる. •小さなx領域では, $\alpha_{x} \ln(1/x)$ が大きくなり重要となる.

 $\frac{\partial}{\partial \ln Q^2} \begin{pmatrix} f_{q_i} \\ f_g \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} P_{q_i \to q_j} P_{g \to q_j} \\ P_{q_i \to g} P_{g \to g} \end{pmatrix} \bigotimes \begin{pmatrix} f_{q_j} \\ f_g \end{pmatrix}$





小さなxでの量子補正の影響



functionsとDISの係数Cに ln(1/x)の再足し上げ効果を含める.

• Fixed orderの結果は不定性が大きく, $\ln(1/x)$ 補正が正しいx依存性を得るために必要.特 にc-クォーク閾値近辺では,チャームPDFの大きさがグルーオンPDFに影響を及ぼす.



xFitter Developers' Team, EPJC78, no.8, 621 (2018)

• NLLx (next-to-leading-log accuracy in $\ln(1/x)$) : NNLOのオーダーで, DGLAP splitting





Froissart-Martin bound (ユニタリティ) $\sigma_{\rm tot} \leq {\rm const.} \times \ln^2 {\rm s}$



Gluon TMD at small-x:

$$\phi(x, k_T^2) \sim \left(\frac{1}{x}\right)^{\alpha_P - 1} \to \sigma_{\text{tot}} \sim s^{\alpha_P - 1}$$

- れFroissart-Martin boundが破れてしまう.
- し, ユニタリティの回復をはかるべき.

From PDG



• 摂動計算(BFKL)では $\alpha_P - 1 > 0.5$. この場合, 衝突エネルギーが上昇すれば, いず

•大きなln(1/x)の足し上げだけでなく,高エネルギー極限特有の量子補正効果を考慮









GLR-QM方程式でスロープが0となる状況では,全次数の ツイストが等しく重要となり、**グルーオン飽和が起こる**.



Q、: ダイナミカルなグルーオン飽和スケール

強い古典的ゲージ場 ($A \sim 1/g$) による摂動論がOK. また, BK-JIMWLK方程式によりグルーオン分布が量子発展する.

再結合 $\frac{\partial \phi(x, k_T)}{\partial \ln(1/w)} \approx K \otimes \left[\phi(x, k_T) - \phi(x, k_T)^2 \right]$ $\partial \ln(1/x)$

Gelis, Iancu, Jalilian-Marian and Venugopalan, Ann. Rev. Nucl. Part. Sci.60, 463 (2010)





17

グルーオン分布関数

Unintegrated gluon distribution (UGD)









2つのパラダイムとグルーオン飽和探索

原子核媒質中のsmall-xグルーオンとの多重散乱 により,粒子対の相関が失われると考えられる. グルーオン飽和の Golden Channel か…?

【警告】 2つの異なる理論の枠組みが同じ結論を出す. • pQCD:多重散乱 + DGLAP • CGC:多重散乱 + BK-JIMWLK

グルーオン飽和の証拠を見つけ出すことは,時間 がかかる研究となる.









飽和スケールが大きい領域で,高精度な計算を進 ン飽和の物理の精密化を目指す。

実験的アプローチ

1. 原子核ターゲットを使用する

- ALIEC-FoCal, LHCb: pp衝突とpA衝突の比較が可能
- ePIC@EIC: クリーンだが, 理想的な"small-x machine"ではない.

2. これまで以上に前方領域を探索する (今日の話)

• LHCf, FASER, SND@LHC, FPF









Part II LHCにおける前方ハ ドロン生成



Event 74374790 Run 173768 Mon, 09 May 2016 01:45:56

Credit: LHCb collaboration





中心領域でのハドロン生成



Lee, Qiu, Sterman, KW, 2108.00305 [hep-ph]





QCD因子化の枠組み (high- p_T)

Perturbatively calculable coefficients

 $\frac{d\sigma_{p+p\to h+X}}{dp_T} \approx \frac{f_{i/p}}{f} \otimes \frac{f_{j/p}}{f} \otimes \frac{D_k^D}{f} \otimes \frac{C_{ij\to k}}{f}$ Universal functions: PDFs, FFs







前方領域でのハドロン生成

 $p + A \rightarrow h + X$ GBW





ハドロン化のモデルの再考

破砕関数は基本的には運動量が大きな領域でのみ使用可能. さらに低運動量領域ではハドロン化のモデリングが必要とな る.グルーオン飽和効果探索にとって極めて重要.

Local Parton Hadron Duality (LPHD) Hypothesis

- パートンの運動方向がハドロン化で変化しない
- バルク粒子生成が $\langle z \rangle$ に依存しない: $dN_{ch}/d\eta$ -
- e^+e^- 衝突での粒子多重度の良い記述を与える.

Lund String Fragmentation model

- qq間に張られるstringの崩壊によるハドロン生成
- PYTHIAでのハドロン化のベースとなっている,

Bierlich et al. SciPost Phys. Codebases 8 (2022)





$$h : p_{\perp}^{g} \langle z \rangle = p_{\perp}^{h}.$$

$$p \sim dN_{g}/d\eta.$$



Dokshitzer, Khoze and Troian, J. Phys. G 17, 1585-1587 (1991) Dokshitzer, Khoze, Mueller and Troian, ``Basics of perturbative QCD," (1991) Khoze and Ochs, Int. J. Mod. Phys. A12, 2949-3120 (1997)

 A/κ^2







24

破砕関数 vs. LPHD vs. String



Deng, Fujii, Itakura and Nara, PRD91, no.1, 014006 (2015)





CGC vs. LHCf data on π^0



Deng, Fujii, Itakura and Nara, PRD91, no.1, 014006 (2015)





CGC+FF vs. LHCb data on D_0



 p_T スロープはOKだが、やはりデータの記述には大きな規格化因子(K = 5)が必要.

Based on [Ma, Tribedy, Venugopalan, **KW**, PRD98, no.7, 074025 (2018)]

$$p + p, \sqrt{s} = 13 \text{ TeV}$$

$$10^{4}$$

$$KKKS08 D(c \rightarrow D_{0}) \text{ is used. } K = 5$$

$$10^{4}$$

$$D_{0}$$

$$D_{0}$$

$$D_{1}$$







Part III FPFでの粒子生成とグルー オン飽和探索の議論





チャームクォーク由来のニュートリノ



• small-xのグルーオンに敏感なプローブであるチャームクォークは, 質量が重いため($m \gg \Lambda_{
m OCD}$), 横 運動量が非常に小さくても摂動論の計算が可能であると期待される.

に調べることができる.



• 高エネルギーニュートリノはD-mesonの崩壊から主に生成される: $u_e,
u_\mu,
u_\tau$. 原子核内のPDFも同時









理論的不定性の起源



チャームからニュートリノへ



- 高エネルギーニュートリノから, 核子のPDFの何らかの情報が読み取れると期待される.
- 響はどの程度あるのか?....

Bhattacharya, Kling, Sarcevic and Stasto, [arXiv:2306.01578 [hep-ph]].

【注意】将来的にグローバルデータフィットを行うのであれば,様々な因子化の問題を検討す る必要がある.本当にグルーオン飽和効果の情報が取り出せるのか? ビームレムナントからの影





Intrinsic charmの寄与:核子内にcは内在するか?



Slide by T. Hobbs for FPF-WG2 talk

challenging to formulate a rigorous definition of intrinsic charm







Intrinsic Charm (IC) from CTEQ & NNPDF



ニュートリノDIS: inclusive νA





• EICとFPFは相補的:lA (EIC) vs. νA (FPF) •ストレンジクォーク分布の精密測定. • shadowing, anti-shadowing, EMC効果



Part IV : 空気シャワーや重イオン 衝突の物理との関係





Figs. from arXiv:2107.09387 [astro-ph.HE]



大気ニュートリノフラックス





• グルーオン飽和効果によって高エネルギー領域での寄与がより小さくなる. • Intrinsic charmの寄与により, 宇宙背景ニュートリノのデータに近づく. グルーオン飽和効果に対する制限にはなっていない。







ストレンジネスの増加の起源

- •古くからストレンジネスの増加は、QGP生成の特徴 と考えられている. Johann Rafelski, 1911.00831 [hep-ph]
- •LHC-ALICEによって、高多重度イベントにおいて中 心ラピディティ領域でストレンジネスの増加が報告 されている.
- 小さな衝突系(pp, pA)でもQGPは生成しているか? もしそうであるならば、その生成機構は?
- ・超前方でも同様な現象は見られるか? FPF実験結果 を通して,ハドロン生成のモデリングへのフィード バックを得たい.



Adam et al. [ALICE], Nature Phys. 13, 535-539 (2017)







高多重度イベント:CGCシナリオ (vs. QGP)



- •CGCに基づくモデル計算だけで,高多重度イベントでのストレンジやチャーム収量の 増加や粒子の集団性に関する様々な結果を説明できる.
- QGP効果とCGC効果は最終的には組み合わせるべきだが, 理論的枠組みがまだ無い.



Dusling and Venugopalan, PRD87, no.9, 094034 (2013)

Long range two-particle correlation



まとめにかえて

➤ 高エネルギー極限においてQCDがグルーオン飽和を予言する.

➤ グルーオン飽和の探索はQCDにとって大きな課題であり,核子構造のより深い理解が必要.

➤ 今後は理論計算の精度をこれまで以上に上げつつ, 様々な実験を包括的に調べることでグルーオン飽和に迫る.

▶ さらなる議論、この分野への新規参入を歓迎します.



Backup